

氏 名	谷 口 真 紀
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（言語コミュニケーション文化）
学 位 記 番 号	甲言第11号（文部科学省への報告番号甲第441号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年8月4日
学 位 論 文 題 目	新渡戸稲造の信仰と実践―「太平洋の架け橋」
論文審査委員	（主査） 教 授 杉 山 直 人 （副査） 教 授 神 崎 高 明 教 授 大 高 博 美 佐 藤 全 弘（大阪市立大学名誉教授）

論 文 内 容 の 要 旨

本論文「新渡戸稲造の信仰と実践——『太平洋の架け橋』」は、新渡戸稲造（1862～1933）のクエーカー信仰と彼の公的な足跡とを関連づけ、クエーカー信仰が晩年に至るまで彼の行動の指針となっていたことを明らかにしようとする試みである。全6章からなる本文構成を、以下各章毎に紹介する。

第1章「新渡戸稲造のクエーカー信仰」は、本論文の出発点としてクエーカー信仰そのものについての解説から始まる。次に新渡戸自己統合の起点としてのクエーカー信仰を、彼のいくつかの文献ばかりでなく、英米の宗教学者による著作からの引用を援用しつつ分析する。「一日本人から見たクエーカー信仰—“A Japanese View of Quakerism”—」（1926）や『修養』（1911）に見られる新渡戸の言葉が紹介され、クエーカー信仰の特徴である「内なる光」が、生涯にわたり新渡戸の行動指針となってゆくことが示唆される。新渡戸の祖国愛を扱った第2章「新渡戸稲造の祖国愛」では、クエーカー信仰と愛国心とが両立可能であったことが、まずは論じられる。しかし本章の力点は、従来あまり採りあげられなかった、「新渡戸にとって国家とは何か」という問いを解明しようとするところに意義がある。

第3章「新渡戸稲造の『武士道』」は、もちろん彼のもっとも著名な著作『武士道』を扱う。『武士道』が描くのは、あくまで明治天皇体制下での「新渡戸武士道」であり、永らく続いた封建体制の元で育まれた武士道ではない、との批判は従来からあった。こうした『武士道』解釈をめぐる議論に谷口氏は深入りはしない。なぜなら、氏にとってはなによりクエーカー信仰と新渡戸の関わりを解明することに主眼があるから。では本章で谷口氏はどこに論点を求めているかと言えば、なにより『武士道』に現れる「接ぎ木」の思想を解明することに主眼を置く。さまざまな顔を持つ新渡戸の多彩な経歴のうち、行政官としての仕事ぶり、そこにあらわれる新渡戸の「哲学」を扱うのが第4章「新渡戸稲造の植民政策論」である。製糖事業を中核とする台湾における新渡戸の植民政策について、谷口氏は複眼的姿勢をみせる。つまり氏によれば、新渡戸はいっぽうで当時の列強が採っていた植民地住民への構造的支配を認める。当時の帝国主義的イデオロギーの黙認である。だが同時に、新渡戸は自らのクエーカー信仰に基づいて、現地住民の福祉と幸福に寄与しようと真剣に希求している、と谷口氏は説く。第5章「満州事変後の新渡戸稲造のアメリカ講演」は本論文の中核をなす章である。先章が扱った植民政策論がそうであったように、渡米中の新渡戸の活動についても評価は二分される。軍国主義化の流れに抗しきれなかったとする一方、そうした時代の枠組みのなかで新渡戸はク

エーカー教徒たる自らの信念に基づいて最善を尽くした、とするものである。しかし、本章で谷口氏が検証しようとするのは、こうした微妙なズレをみせる渡米中の新渡戸評価をめぐる争点是非ではない。そうではなくて、アメリカ世論に対しては日本の立場を弁護しつつ、同時に日米両国民に国際協調を求めた新渡戸の「矛盾」はどこから来るのか、という問題である。終章「『編集余録』から見た新渡戸稲造の晩年と信仰」は最晩年の約3年間に新渡戸が筆をふるって毎日のように『英文大阪毎日』に掲載した、合計730編に及ぶ「編集余録」の分析を中心としている。これはクエーカー信仰がどのような形をとって、稲造の最晩年を彩っていたかを探ろうとする試みである。

論文審査結果の要旨

本論文は新渡戸研究の基を「クエーカー信仰」に求めた点で、まず評価されるべき研究である。日本人としては新渡戸が初めてのクエーカー信者であったことは、もちろん広く知られてはいる。だが従来の新渡戸研究の多くはややもすれば、彼の公的生活のなかでクエーカー教徒として彼がいだいた信仰や哲学が、どのような影響を公的生活に及ぼし、いかなる意義をもったかを正面から探究しようとしたものは多くはなかった。政治家や行政官、はたまた教育者としての足跡に基づいて、あるいは肯定的に、あるいは否定的に評価を下してきたのである。

政界や実業界で活躍した戦前の著名人には往々にしてあることだが、昭和20年を境として起きた日本社会の価値変化のために、新渡戸の場合もトータルな評価が、現代にあっては難しくなる傾向がある。戦前にあって、新渡戸はまずはリベラルな政治色をもつ国際派外交官の筆頭格であった。軍国主義と偏狭なナショナリズムが吹き荒れた時代、彼が勇敢に軍部を批判したことで、世論や言論界の一部から強い反発を招いたのは周知の事実である。しかし同時に、『武士道』を中心とした一連の著作にあって愛国的姿勢を顕著にみせた新渡戸は、海外に向けては日本の伝統について情報発信に努めもしている。わけでも熱心な天皇崇拜者だったこともあり、政治的自由が保障されている現在から見た新渡戸像からは、保守的価値観の体现者としての側面も浮かびあがってくる。このように、維新から敗戦に至る日本の歩みがもたらした社会的、歴史的亀裂が新渡戸評価にはついてまわるのである。

新渡戸の公的足跡を跡づける際も、戦前日本の海外における活動と、それらに直接間接に関わることの多かった新渡戸の立場をどう解釈するかによって、彼の評価は別れよう。今日の新渡戸評価に影響を与えている彼の海外活動には、主要なものがふたつ挙げられる。ひとつは新渡戸が台湾でおこなった植民地事業である。彼がどのような植民政策をとり、そこにどのような彼の「思想」が流れていたかをめぐっては、1981年『毎日新聞』紙上で飯沼二郎（1918-2005）と佐藤全弘のあいだに論争が交わされた。新渡戸を「生粋の帝国主義者」と断ずる飯沼は、新渡戸が諸民族の独立を無視して植民地支配を肯定していた、と主張した。いっぽう佐藤は新渡戸の植民地思想が人道主義に基づいていたと反論している。

台湾での植民政策にも増して今日の新渡戸評価に影響しているのは、満州事変勃発後の1932年から翌年にかけて渡米したさい、彼のおこなった講演活動である。さきにも触れたが、滞米中新渡戸は満州における権益を守ろうとする日本の軍事行動を弁護している。日露戦争でこうむった多大の犠牲のうえに日本が橋頭堡を築いて整備発展させた満州は、日本の安全保障と経済発展のために、必要欠くべからざる生命線であって、満州を確保するのは日本にとっての正当な自衛行為であり、列強にはこうしたわが国の権利を侵害する権限はない、という主張だった。歴史的に見て「アングロ・サクソン帝国」が西方に進出しようとしてきたのと同様に、日本は満州に進出したにすぎない、というのである。

戦前日本の行動、教育、価値観すべてを否定しがちな戦後日本の風土にあって、こうした主張が新渡戸評価にネガティブな影を落としてきたことは容易に理解できる。だが忘れてならないのは、さきにも触れたと

おり、新渡戸は軍国主義者や国家主義者にたいしては強い嫌悪を示し、戦争への道を歩もうとする軍部を牽制するほどの硬骨漢でもあったことである。偏狭な愛国主義者ではなくて、基本的にバランスのとれた国際主義者だった事実である。自由主義的傾向を身上とするリベラルな外交官だったことである。アメリカ人を妻に持ち、欧米でもながらく勉学に励み、国際連盟事務次長にまで抜擢されたほどの、戦前日本には稀有な逸材だった。西欧での知人も枚挙にいとまのないほど幅広い交際範囲と、文化的教養を身につけていた親米派だったのである。それがために、アメリカ世論が中国への同情と反日に傾くのをまえにしたときには、日本への理解を懸命に求めて奮闘することにもなった。

こうした新渡戸の矛盾する立場を解明するカギこそ、谷口氏の考えによれば、彼のクエーカー信仰なのである。クエーカー信仰によって自己統合を果たした新渡戸の文明観や国家観には、キリスト教を育んできた西欧流価値基準が据えられてしまっていた。西欧中心主義の色眼鏡を通して、新渡戸は世界を見てしまったのである。だから、満州事変における当時の中国をめぐり、ひとつの国家が近代国家としての秩序を備えているかどうかを判断する際も、西欧の物差しで計ってしまう。

満州にたいする日本の軍事行動を正当化する際、その根拠として新渡戸は当時の中国には自治能力が欠如している、と考えた。確かに中国はこの時代、中央政府の統治能力が地に落ち、満州は軍閥が割拠するという情勢であった。アヘン戦争以来の西欧列強による侵略は、中国の健全な国家建設を妨げ、それに基づく社会の近代化を不可能としていたのである。中国人の人間性・歴史・文化への敬意とは別の次元で、新渡戸は中国近代化が失敗しており、国家としての自治能力に不備があることを指摘した。統一国民国家形成が順調に進捗しないことを理由に、新渡戸は中国を「独立国家」と認めることができなかった。谷口氏によれば、ここで特筆すべきは、こうした新渡戸の中国観が彼のアメリカ観とは好対照をなしていたことである。

東京帝大に設置されたアメリカ研究講座での新渡戸の講義録が1919年に『米国建国史要』として出版された。そこに見られる彼のアメリカ礼賛は、いかに新渡戸がアメリカという国家のあり方に心酔し、敬意の念を抱いていたかを語って余すところがない。いわく「新時代の合言葉として普く世界に唱道せらるる民主、民本説の如きは、その根元は、国々各々趣を異にするにしても、その運用に於ては米国を以つて好例とするではないか。人爵を以つて社会上下の尺度とした旧世界に対し、天爵一点張りで押し通す米国風は、人間の評価法を変へんとするものであるから、旧思想に取りては、如何にも危険であらうが、人生の如実の形相に目覚め、価値の標準を真理に求めやうとするものに取つて、それは、絶えず世界の刺戟とインスピレーションとを与ふる……」。旧世界の桎梏から解放され、社会階級たる「人爵」で人間を評価せず、人格という「天爵」に従って人間や人生の価値を追求するキリスト教国こそがアメリカであると確信し、アメリカ流民主主義を諸手を挙げて賛美する新渡戸が、旧態依然たる国家体制さえも地盤固めできないままの中国を、独立国家として認めることを躊躇したのも、けだし避けがたいことだったかもしれない。

封建体制の残滓を引きずる満州事変当時の中国を近代国家として尊重できなかった新渡戸は、他方ヨーロッパ文明の「精髓」が新大陸の地に移植され、民主主義という近代市民社会を支える哲学に則って成立した国家としてアメリカをとらえ、まさにそのことを根拠としてアメリカを賛美した。これは、封建体制から近代市民社会成立へと移行することをあくまでとする、西欧的価値観を中核として成立する世界像に依拠した国家観である。こうした新渡戸の国家観形成に、谷口氏によれば「内なる光」に導かれる自立した個としての市民に支えられた社会をめざすクエーカー信仰や、さらに広くキリスト教信仰は大きな影響を及ぼしたのである。こうして台湾での植民地事業に見られる現地住民への配慮、また彼らの福祉向上への新渡戸の真摯な取り組みと、満州にたいする日本の軍事行動は正当な権利行使である、とした彼のアメリカにおける講演とは、けっきょくはクエーカー信仰のもつ光と影を、そしてクエーカー信仰の限界をも露呈していることになる。

クエーカー信仰に限らず、そもそもキリスト教信仰を受け入れるということ自体、単に絶対的唯一神を信

じるのかどうか、という限定された心の領域で西洋を受け入れるだけにはとどまらない。そうではなくて、もっと広く西洋の歴史や社会のあり方をどう自分なりに理解するか、また自らの東洋的風土との兼ねあいもどうか、といった形而上的な問題までもが含まれることになる。人によって程度の差はあっても、キリスト教を二千年間育んだ西欧的思考や価値観と、なんらかの形で向かい合うことが、求められるのである。こうした構図は、現代にあっても「異教」の文化圏に育ってきた日本人が洗礼を受ける場合に経験するところだろう。ましてや新渡戸や内村のように、260年続いた封建体制下でサムライとして生まれ育った教育を受け、維新によってアメリカを通して初めて西欧そのものに触れた日本人だった彼らにすれば、そうした体験は21世紀の日本人が想像する以上のインパクトを伴っただろう。

新渡戸にとっても内村にとっても、「アメリカ体験」はアメリカが故国を圧倒する国家であることを印象づけた。ふたりは共にアメリカに敬意を抱いた。『余は如何にして基督信徒となりし乎』が語る如く、渡米早々に人種差別と拝金主義の洗礼を受けてアメリカ社会のあり方に憤りを感じた内村も、最後にはアメリカの「国民的良心」を語り、アメリカの理想を高らかに賛美して自叙伝を終わっているではないか。谷口氏の指摘にあるとおり、新渡戸もまた「私はアメリカの最大の賞賛者の一人です」と断言してはばからない。ふたりはともに、キリスト教を通してアメリカに魅入られた日本人であった。新渡戸が中国を近代国家とは見なさず、満州における日本の軍事行動を是とし、同時にアメリカ社会に対しては、アメリカが中国に傾斜しつつあるなかで、日本への理解と友好を求めるといふ、いささか虫のいい（と谷口氏には映る）行動を繰り返すことになったのは、氏が示唆するように、アメリカを愛する余り、かの国こそが「日本と自分自身の近代化」にとっての最良モデルだと信じていたからに他ならない。

こうして谷口氏は、本論文第5章に至るまで、生涯揺るぐことのなかった新渡戸のクエーカー信仰の背後にある西欧とアメリカの影を、彼の公的活動のなかに探ってゆく。本論文の読みどころは、クエーカー信仰の光りと影を、台湾での植民事業や満州事変後のアメリカ講演に、巧みなバランスを保ちながら跡づけてゆく手際の良さにある。光と影を浮き彫りにする谷口氏の論旨展開はよく計算されており、先行研究はもちろんのこと、書簡や日記、ときには新資料までもを動員した議論の流れは、力強い文章ともあいまって本論文を説得的なものにしている。

日本と中国、また日本とアメリカをめぐる新渡戸の公的活動のなかに、クエーカー信仰の光と影をあとづけてきた谷口氏の歩みは、最終章『『編集余録』から見た新渡戸稲造の晩年と信仰』に至ってトーンを変える。というのも、最終章が扱うのは公的活動というよりも、まずは戦前日本の稀有な国際人の内面探索という色彩を帯びるからである。

冒頭紹介したように、最終章は新聞紙上に最晩年の新渡戸が執筆した雑感中心の「編集余録」を採りあげる。この「編集余録」については研究が進んでおらず、わずかに佐藤全弘の論文が一編あるのみ、という。この意味でも谷口氏の論考は貴重である。700編を超える記事の多くは、くつろいだ雰囲気漂わせており、私人としての新渡戸の人柄を読み解くのに好都合である。執筆に際して、デリケートな国際政治や戦時色濃厚となった国内情勢に過剰な意を払う必要もなかったせいか、筆致は自然で文章にも堅さはあまりない。

「余録」全体のなかで最もその数が多いジャンルは、谷口氏の分類によれば「人間性」を扱うものであるという。ただし、紹介と分析の対象としては、新渡戸の心情や思索を汲みとるために「宗教」、「人生」それに『『翁』』（新渡戸の分身として登場する語り手）の三つに細分されたジャンルを中心に谷口氏はまとめている。

「宗教」をあつかった谷口氏の記述のなかに、新渡戸の最期を考えるとときに印象的なものはいくつか見つかる。たとえば、解釈が多様で定説がない「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」というイエスの最後の言葉について新渡戸は、（谷口氏によれば）その言葉が「人生の決勝点の讃歌」である、という解釈を支持したという。また文字通り死の数日前、病床にあって執筆した記事のなかで新渡戸は、「人間には物事を二項対立に捉える傾向がある」ことを指摘し、それらふたつの対極をつなぐ「第3の軸」を導入して「中立的立場」

を備えることの重要性を語った、という。この場合「中立的立場」とは人間がまわりの世界と採るべき人生の「位置」を示すものであり、もちろん新渡戸が人生の理想とした「中庸」そのものである。

「翁」をモチーフにした記事は約35編あるという。「翁」は新渡戸の分身である。つまり「翁」を直接の語り手として記事に登場させたことによって、新渡戸自身はどのようなトピックを扱う場合も、自分自身で語るときよりも、そのトピックから一定の距離を置くことができるようになった。だから「翁」は限りなく新渡戸に近い考えをそのまま語ることもあれば、いっぽうで新渡戸自身は共感も賛同もしない意見を口にすることもできるわけである。新渡戸にとっては便利な代弁者を得たことになる。「翁」は信仰やユーモア、時代思潮などについて、あれこれとコメントするが、死の一ヵ月まえに発表された記事は、満州事変後の不穏な国内情勢をめぐって、人生の終わりを迎えつつあった新渡戸が、どのような考えを抱いていたかを示唆する点で興味深い。いつものように微笑みを絶やさない「翁」をまえに、新渡戸は「なぜこんな時に笑っているの?」と問う。すると返ってきた答えは「次の時代を見据えているからだよ」というものだった。暗い時代だった。戦争の10年が新渡戸の死後、続くことになった。だが平和を真摯に希求した新渡戸は「翁」の言葉に一筋の光りを見いだそうとしていたのだ、と谷口氏は語る。激動の時代を生き抜いた新渡戸にとって、「翁」は、まだ見えてこない平和な時代へと彼をいざなう水先案内人だったわけで、新渡戸が最後にたどり着いた境地は、同時に彼のクエーカー信仰がめざした平和への予見だったのである——本論文最終章は、このように終わっている。

クエーカー信仰が新渡戸の足跡や業績にどのようなかわりを持ち、どう影響したかを論じた本論文は、新渡戸の植民地経営と満州事変後の滞米講演をめぐってクエーカー信仰にまつわる光と影を明らかにした。また晩年の新聞コラム分析を通して、新渡戸の内面でクエーカー信仰が最後にたどり着いた境地を明らかにしている。論述に力が入るせいか、日本語表現が難解すぎる傾向が見られ、読みほぐすのに時間が必要なきがあるが、そのために本論文の価値が損なわれるものでもない。

谷口真紀氏の論文を慎重に審査し、6月29日に実施した口頭試問の結果をも併せて協議した審査員4名は、氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するにふさわしいと判断するに至り、ここに報告するものである。